

4章 整備に向けた課題

1. 遺跡の保存・修理

水城跡は、長年に亘る経年劣化により、様々な箇所において土塁のき損が進行している。また、こうした状況に追い打ちをかけるように、平成 18 年に北部九州を襲った台風 13 号が、土塁上の樹木をなぎ倒し、遺構に甚大な被害を与えた。この時に受けた損傷は非常に大きく、環境整備にあたってはこうした災害に備えた予防措置も課題である。

水城跡を末永く保存していくためには、遺構に悪影響を与えている樹木の間伐整理を推進する。また遺構損傷箇所については危険箇所を優先的に修理・復旧といった保存整備を行う必要がある。そうした保存整備を第一に行う。ただし樹木については、地域の貴重な緑であり水城の視認性を高める要素でもある事から、大幅な伐採には反対の声も多く、取り扱いには慎重に行う必要がある。

太宰府市では平成 21 年度から、大野城市では平成 20 年度から保存修理を開始し、土塁上で繁茂した樹木の整理を行いつつ、平成 22 年度には御笠川左岸欠堤部のり面の保存修理、平成 23 年度には御笠川左岸土塁保存修理など、順次保存修理が行われつつある。

さらに、修理・修復後も遺構の損傷、修理の履歴等を把握するカルテ等を作成するなど、遺跡の定期的なモニタリングが必要である。

2. 遺構の表現

これまでの水城跡の調査によって、土塁前面の博多側に外濠が存在することや、導水施設である木樋が土塁下部の数カ所に埋設されていることなどが明らかとなった。さらに地誌や残る礎石から予測された門についても、築造当初から幾度かの建て替えが行われ、また前後に官道がのびることも確認された。このようにわかったことを来訪者に知ってもらうには、復元は有効である。全ての復元はできずともその一部を復元することは史跡理解の一助となる。

しかし、水城跡は大規模な遺構であり、かつ長期に亘って存在してきたことから、各時代の姿や今日までの歴史的変遷を全て理解するまでには至っていない。この遺跡の特質でもある、濠の在り方や規模、木樋による導水方法、御笠川との関係等、各施設の機能や関連についても未解明な部分が多々ある。今後も発掘調査や自然科学分析等の各種調査を継続し、遺跡の全容解明に向けて取り組んでいく必要がある。そして、この調査成果に基づきながら復元手法や表現のレベル設定等、整備の方向性についても繰り返し検討することが望ましい。

3. 遺跡の活用

水城跡は、“大宰府都城への北側からの導入部となる地区”と位置づけられる。この位置づけは、現在の交通体系の中にも引き継がれており、九州自動車道や国道、JR 鹿児島本線等の主要な交通動線が集中している。これらにより水城跡は分断され、土塁の連続性が失われている。将来的には水城本来の空間特性の復元を目指し、水城跡を縦断できる回遊ルートを設置することで連続性を回復することが望まれる。

また、来訪者のアクセスを考慮した導入拠点の配置や水城跡を知ってもらう上で重要な場所等を回遊拠点として整備し、それらを含め全体をつなぐネットワークの形成に取り組むことで、より多くの人に親んでもらえる史跡地の公開を目指す必要がある。

さらに、水城跡の維持管理・保存活用に地域や市民を広く参加してもらうためにも、現在の水城跡を身近で親しみのある史跡として認識し、水城跡がもつ歴史・自然環境を活用し、水城跡のことを知る、学ぶといった体験を通して、水城跡に関心を持つことを狙い、更に、関心を持つ市民には、より積極的な参加を促すため、水城跡の維持管理・保存活用に関わることができる仕組みをつくっていくことが必要である。